

花吹雪

太宰治

青空文庫

花吹雪という言葉と同時に、思い出すのは勿来なごその関である。花吹雪を浴びて駒を進める八幡太郎義家の姿は、日本武士道の象徴かも知れない。けれども、この度の私の物語の主人公は、桜の花吹雪を浴びて闘うところだけは少し義家に似ているが、頗すこぶる弱い人物である。同一の志趣を抱ほう懷かいしながら、人さまさま、日陰の道ばかり歩いて一生涯を費消する宿命もある。全く同じ方向を意図し、甲乙の無い努力を以て進みながらも或る者は成功し、或る者は失敗する。けれども、成功者すなわち世の手本と仰がれるよ

うに、失敗者もまた、われらの亀鑑きかんとするに足ると言つたら叱られるであらうか。人の振り見てわが振り直せ、とかいふ諺ことわざさえるようではないか。この世に無用の長物ちようぶつは見当らぬ。いわんや、その性善にして、その志向するところ甚だ高遠なるわが黄村先生に於おいてをやである。黄村先生とは、もとこれ市井しせいの隠にして、時たま大いなる失敗を演じ、そもそも黄村とは大損の意かと疑わしむるほどの人物であるけれども、そのへまな言動が、必ずわれらの貴い教訓になるといふ点に於いてなかなか忘れ難い先生なのである。私は今年のお正月、或る文芸雑誌に「黄村先生言行録」と題して先生が山椒魚に熱中して大損をした時の事を報告し、世の賢者たちに、なんだ、ばかばかしいと顰ひんしゆく蹙しゆくせられて、私

自身も何だか大損をしたような気さえたのであるが、このたびの先生の花吹雪格闘事件もまた、世の賢者たち^{ある}に或いは憫^{びん}笑^{しょう}せられるかも知れない。けれども、あの山椒魚の失敗にしても、またこのたびの逸事にしても、先生にとつては、なかなか悲痛なものがあつたに違いない、と私には思われてならぬので、前回の不評判にも懲^こりずに、今回ふたたび先生の言行を記録せむとする次第なのである。先生の失敗は、私たち後輩への佳^よき教訓になるような気がする、前回に於いても申述べて置いた筈^{はず}であるが、そんなら一体どんな教訓になるのか、一言でいえば何か、と詰^つ寄^められると、私は困却するのである。人間、がらでない事をするな、という教訓のようでもあり、いやいや、情熱^{ほんとう}の奔騰^{ほんとう}するところ、

ためらわず進め！ 墜落しても男子の本懐、何でもやってみる事だ、という激励のようでもあり、結局、私にも何が何やらわからないのだ。けれども、何が何やらわからぬ事実の中から、ふいと淋^{さび}しく感ずるそれこそ、まことの教訓のような氣もするのである。吹く風をなこそその関という歌の心を一言でいい切る事が至難なのと同様に、どうも、親切な教訓ほど、一言で明示する事はむずかしいようである。先日、私が久しぶりで阿佐ヶ谷の黄村先生のお宅へお伺いしたら、先生は四人の文科大学生を相手に、氣焰^{きえん}を揚げ^あげておられた。私もさっそく四人の大学生の間に割込んで、先生の御高説を拝聴したのであるが、このたびの論説はなかなか歯切れがよろしく、山椒魚の講義などに較べて、段違いの出来栄えの

ようであつたから、私は先生から催促されるまでも無く、自発的に懷中から手帖を出して速記をはじめた。以下はその座談筆記の全文であつて、ところどころの括弧かっこの中の文章は、私の蛇足だそくにも似た説明である事は前回のとおりで。

なに、むずかしい事はありません。つまらぬ知識に迷わされるからいけない。女は、うぶ。この他には何も要いらない。田舎でよく見かける風景だが、麦畑で若いお百姓が、サトやああい、と呼ぶと、はるか向うでそのお里さんが、はああい、と実になんともうれしそうな恥ずかしそうな返事をするね。あれだ。あれだよ。あれでいいのだ。諸君が、もし恋愛小説を書くんだったら、あの

ような健康な恋愛をこそ書くべきですね。男と女が、コオヒイと称する豆の煮出汁に砂糖をぶち込んだものやら、オレンジなんかいう黄色い水に蜜柑^{みかん}の皮の切端を浮べた薄汚いものを、やたらにがぶがぶ飲んで、かわり番こに、お小用に立つなんて、そんな恋愛の場面はすべて浅墓というべきです。先日、私は近所の高砂館へ行つて久し振りに活動を見て来たが、なんとかいう旧劇にちよつといい場面が一つありました。若侍が剣術の道具を肩にかついで道場から帰る途中、夕立になって、或る家の軒先に雨宿りするのですが、その家には十六、七の娘さんがいてね、その若侍に傘^{かさ}をお貸ししようかどうかと玄関の内で傘を抱いたままうろうろしているのですね。あれは実に可愛かった。私はあの若侍

を嫉妬しつとしました。女は、あのようであればいけない。若い男のお客さんにお茶を差出す時なんか、緊張のあまり、君たちの言葉を遣つかえば、つまり、意識過剰という奴をやらかして、お茶碗をひっくり返したりする実に可愛い娘さんがいるものだが、あんなのが、まあ女性の手本と言つてよい。男は何かというと、これは、私も最近ようやく氣附いた事で、この大発見を諸君に易々と打明けるのは惜しいのであるが、（そうおつしやらずに、へへ、と言いし学生あり。師を軽んずるは古来、文科学生の通弊とす。）ただいま期せずして座の一隅より、切望懇願のうめき声が発せられたようでもあり、まあ致しかた無い、御伝授しましょう。男子の眞価は、武術に在り！（一座色をなせり。逃にげたく仕度せし臆病の

学生もあつた。）強くなくちやいけない。柔道五段、剣道七段、あるいは弓術でも、からて術でも、銃剣術でも、何でもよいが、二段か三段くらいでは、まだ心細い。すくなくとも、五段以上でなければいけない。愚かな意見とお思ひの方もあるだろうが、たとい国の平和な時でも、男子は常に武術の練磨に励まなければいかなかつたのだ。科学者たらしとする者も、政治家たらしとする者も、また宗教家、あるいは、そこに（速記者のほうを、ぐいと顎^{あご}でしゃくつて、）いらつしやる芸術家の卵にしても、まず第一に、武術の練磨に努めなければならなかつたのに、うかつにも之^{これ}を怠つていたので、ごらんのとおり皆さん例外なく卑屈である。怒り給うな。私だつて諸君と同じ事です。私は過去に於いて、政

治運動をした事もある。演劇の団体に関係した事もある、工場を経営した事もある、胃腸病の薬を発明した事もある、また、新体詩というものを試みた事だつてある。けれども、一つとして、ものにならなかった。いつもびくびくして、自己の力を懷疑し、心の落ちつく場所は無く、お寺へかよつて禅を教へてもらつたり、或いは部屋に閉じこもつて、手当り次第、万巻いや千巻くらいの^{ある}書を読みちらしたり、大酒を飲んだり、女に惚れた真似をしたり、さまざまに工夫してみたのであるが、どうしても自分の生き方に自信を持てなかつた。新劇の運動に参加しても、すぐに、これでもいいのか、という疑問が生じて、それこそ三日経てば、いやになつたほうです。何か自分に根本的な欠陥があるのではないか、と

沈思の末、はたと膝を打った。武術！これであります。私は男子の最も大事な修行を忘れていたのです。男子は、武術の他には何も要らない。男子の一生は戦場です。諸君が、どのような仕事をなさるにしても、腕に覚えがなくてはかなわぬ。何がおかしい。私は、真面目に言っているのです。腕力の弱い男子は、永遠に世の敗北者です。人と対談しても、壇上にて憂国の熱弁を振うにしても、また酒の店でひとりで酒を飲んでいる時でも、腕に覚えの無い男は、どこやら落ちつかず、いやらしい眼つきをして、人に不快の念を生じさせ、蔑視^{べっし}せられてしまうものです。文学の場合だつて同じ事だ。（ぎよろりと速記者を、にらむのである。）文学と武術とは、甚だ縁の遠いもので、青白く、細長い顔こそ文

学者に似つかわしいと思つてゐるらしい人もあるようだが、
でもない。柔道七段にでもなつて見なさい。諸君の作品の悪口を
言うものは、ひとりも無くなります。あとで殴られる事を恐れて
悪口を言わないのではない。諸君の作品が立派だからである。そ
こにいらつしやる先生（と、またもや、ぐいと速記者のほうを顎
でしゃくつて、）その先生の作品などは、時たま新聞の文芸欄で、
愚痴ぐち痴といやみだけじゃないか、と嘲ちやうしょう笑せられているようで、
お気の毒に思つていますが、それもまたやむを得ない事で、今ま
で三十何年間、武術を怠り、精神に確固たる自信が無く、きよう
は左あすは右、ふらりふらりと千鳥足の生活から、どんな文芸が
生れるか凡おほそわかり切つてゐる事です。いまからでも柔道あるい

は剣道の道場へ通うようにするがいい。本当に笑いごとではないのです。明治大正を通じて第一の文豪は誰か。おそらくは鷗外、森林太郎博士であろうと思う。あのひとなどは、さすがに武術のたしなみがあつたので、その文章にも凜^{りんこ}乎たる氣韻^{きいん}がありましたね。あの人は五十ちかくなつて軍医総監という重職にあつた頃でも、宴会などに於いて無礼者に対しては敢然と腕力をふるつたものだ。（まさか、という声あり。）いや、記録にちゃんと残っています。くんづほぐれつの大格闘を演じたものだ。鷗外なおかくの如し。いわんや、古来の大人物は、すべて腕力が強かった。ただの学者、政治家と思われる人でも、いざという時には、非凡な武技を発揮した。小才だけでは、どうにもならぬ。武術の達

人には落ちつきがある。この落ちつきがなければ、男子はどんな仕事もやり了^{おお}せる事が出来ない。伊藤博文だって、ただの才子じやないのですよ。いくたびも剣^{つるぎ}の下をくぐつて来ている。智慧^{ちえ}のかたまりのように言われている勝海舟だって同じ事です。武術に練達していなければ、絶対に胆^{きも}がすわらない。万卷の書を読んだだけでは駄目だ。坊主だってそうです。偉い宗教家は例外なく腕力が強い。文覚上人の腕力は有名だが、日蓮だって強そうじゃないか。役者だってそうです。名人と言われるほどの役者には、必ず武術の心得があつたものです。その日常生活に於て、やたらに腕力をふるうのは、よろしくないが、けれどもひそかに武技を練磨し、人に知られず剣道七段くらいの腕前になっていたら、いい

だろうなあ。（先生も、学生も、そろって深い溜息ためいきをもらせり。
）いや、しかし之は、閑人のあこがれに終らせてはいけない。
諸君は、今日これから直ちに道場へ通わなければならぬ。思う念
力、岩をもとおす。私は、もはや老齡で、すでに手おくれかも知
れぬが、いや、しかし私だつて、——（口を噤つぶんだ。けれども、
何か心に深く決するところがあるらしく察せられた。）

二

このたびの黄村先生の、武術に就ついての座談は、私の心にも深
くしみるものがあつた。男はやっぱり最後は、腕力にたよるより

他は無いもののようにも思われる。口が達者でずうずう図々しく、反省

するところも何も無い奴には、ものも言いたくないし、いきなり

鮮やかな背負投げ一本くらわせて、そいつのからだを大きく宙に

一廻転させ、どたん、ぎやつという物音を背後に聞いて悠然と引

上げるという光景は、想像してさえ胸がすくのである。歌人の西さ

いぎよう

行なども、強かったようだ。荒法師の文もん覚が、西行を、き

ざな奴だ、こんど逢あったら殴ってやろうと常日頃から言っていた

癖に、いざ逢ったら、どうしても自分より強そうなので、かえつ

て西行に饗きよう応おうしたとかいう話も伝わっているほどである。ま

ことに黄村先生のお説のとおり、文人にも武術の練磨が大いに必

要な事かも知れない。私が、いつも何かに追われているように、

朝も昼も夜も、たえずそわそわして落ちつかぬのは、私の腕力の貧弱なのがある最大理由の一つだったのであろうか。私は暗い気がした。私は五、六年前から、からだの調子を悪くして、ピンポンをやつてさえ発熱する始末なのである。いまさら道場へかよつて武技を練るなどはとても出来そうもないのである。私は一生、だめな男なのかも知れない。それにしても、あの鵑外がいいとして、宴会でつかみ合いの喧嘩けんかをしたとは初耳である。本当かしら。黄村先生は、記録にちゃんと残っている、と断言していたが、出鱈目ではなからうか。でたらめ私は半信半疑で鵑外全集を片端から調べてみた。しかるに果してそれは厳然たる事実として全集に載っているのを発見して、さらに私は暗い気持になつてしまった。

あんな上品な紳士然たる鴟外でさえ、やる時にはやったのだ。私は駄目だ。二、三年前、本郷三丁目の角で、酔っぱらった大学生に喧嘩を売られて、私はその時、高下駄たかげたをはいていたのであるが、黙って立っていてもその高下駄がカタカタカタと鳴るのである。正直に白状するより他は無いと思った。

「わからんか。僕はこんなに震えているのだ。高下駄がこんなにカタカタと鳴っているのが、君にはわからんか。」

大学生もこれには張合いが抜けた様子で、「君、すまないが、火を貸してくれ。」と言って私の煙草たばこから彼の煙草に火を移して、そのまま立去ったのである。けれども流石さすがに、それから二、三日、私は面白くなかった。私が柔道五段か何かであつたなら、あんな

無礼者は、ゆるして置かんのだが、としきりに口惜しく思つたものだ。けれども、鵠外は敢然とやったのだ。全集の第三巻に「懇親会」という短篇がある。

(前略)

此時このとき座敷の隅を曲つて右隣の方に、座蒲団ざぶとんが二つ程あいていた、その先の分の座蒲団の上へ、さっきの踊記者が来て胡坐あぐらをかいた。横にあつた火鉢を正面に引き寄せて、両手で火鉢の縁を押えて、肩を怒らせた。そして顚あごを反そらして斜に僕の方を見た。傍へ来たのを見れば、褐色の八字髭ひげが少しあるのを、上に向けてねじつてある。今初めて見る顔である。

その男がこう云つた。

「へん、気に食わない奴だ。大沼なんぞは馬鹿だけれども剛直な奴で、重りがあつた。」

こう言いながら、火鉢を少し持ち上げて、畳を火鉢の尻で二、三度とんとんと衝いた。大沼の重りの象徴にする積りと見える。

「今度の奴は生利に小細工をしやがる。今に見ろ、大臣に言つて遣^やるから。（間。）此間委員会の事を聞きに往つたとき、好くも幹事に聞けなんと云つて返したな。こんど逢つたら往来へ撮^{つま}み出して遣る。往来で逢つたら刀を抜かなけりやならないようにして遣る。」

左隣の謡曲はまだ済まない。（中略）右の耳には此脅迫の声が聞えるのである。僕は思い掛けない話なので、暫^{しばらく}くあつけに取ら

れていた。（中略）そして今度逢つたらを繰り返すのを聞いて、何の思索の暇もなくこう云つた。

「何故今遣らないのだ。」

「うむ。遣る。」

と叫んで立ち上がる。

以上は鴟外の文章の筆写であるが、これが喧嘩のはじまりで、いよいよ組んづぼぐれつの、つかみ合いになって、

（中略）

彼は僕を庭へ振り落そうとする。僕は彼の手を放すまいとする。手を引き合つた儘、二人は縁から落ちた。^{まま}

落ちる時手を放して、僕は左を下に倒れて、左の手の甲を花崗

岩で擦りむいた。立ち上がって見ると、彼は僕の前に立っている。僕には此時始めて攻勢を取ろうという考が出た。併し既に晩かおそった。

座敷の客は過半庭に降りて来て、別々に彼と僕とを取り巻いた。彼を取り巻いた一群は、植込の間を庭の入口の方へなだれて行く。四五人の群が僕を宥なだめて縁から上がらせた。左の手の甲が血みどれになっているので、水で洗えと云う人がある。酒で洗えと云う人がある。近所の医者の方へ石炭酸水を貰いに遣れと云う人がある。手を包めと云って紙を出す。手拭を出す。（中略）

鴟外の描写は、あざやかである。騒動が、眼に見えるようだ。そうしてそれから鴟外は、「皆が勧めるから嫌な酒を五六杯飲ん

だ。」と書いてある。顔をしかめて、ぐいぐい飲んだのであろう。やけ酒に似ている。この作品発表の年月は、明治四十二年五月となつてゐる。私たちの生れない頃である。鵜外の年譜を調べてみると、鵜外はこの時、四十八歳である。すでにその二年前の明治四十年、十一月十五日に陸軍々医総監に任ぜられ、陸軍省医務局長に補せられている。その前年の明治三十九年に、功三級に叙せられ、金鵄勲章きんしゅくんしょうを授けられ、また勲二等に叙せられ、旭日重光章を授けられているのである。自重しなければならぬ人であつたのに、不良少年じみた新聞記者と、

「何故今遣らないのだ。」

「うむ。遣る。」

などと喧嘩をはじめるとは、よつぽど鷗外も滅茶な勇氣のあつた人にちがいない。この格闘に於いては、鷗外の旗色はあまり芳^{かんば}しくなく、もつぱら守勢であつたように見えるが、しかし、庭に落ちて左手に傷を負うてからは「僕には、此時始めて攻勢を取ろうという考が出た。」と書いてあるから、^{すこ}凄^{すこ}い。人がとめなければ、よつぽどやつたに違いない。腕に覚えのある人でなければ、このような張りのある文章は書けない。けれども、これは鷗外の小説である。小説は絵^え空^{そら}事^{こと}と昔からきまっている。ここに書かれてある騒動を、にわかに「事実」として信じるわけには行かない。私は全集の日記の巻を調べてみた。やつぱり在った。

明治四十二年、二月二日（火）。陰りて風なく、寒からず。

（中略）夕に赤坂の八百勘に往く。所謂^{いわゆる}北斗会とて陸軍省に入する新聞記者等の会合なり。席上東京朝日新聞記者村山某、小池は愚直なりしに汝は軽薄なりと叫び、予に暴行を加う。予村山某と庭の飛石の間に倒れ、左手を傷く。

これに拠^よつて見ると、かの「懇親会」なる小説は、ほとんど事実そのままと断じてても大過ないかと思われる。私は、おのれの意気地の無い日常をかえりみて、つくづく恥ずかしく淋しく思った。かなわぬまでも、やってみたらどうだ。お前にも憎い敵が二人や三人あつた筈^{はず}ではないか。しかるに、お前はいつも泣き寝入りだ。敢然とやったらどうだ。右の頬を打たれたなら左の頬を、というのは、あれは勝ち得べき腕力を持っていても忍んで左の頬を差出

せ、という意味のようでもあるが、お前の場合は、まるで、へどもどして、どうか右も左も思うぞんぶん、えへへ、それでお気がすみます事ならどうか、あ、いてえ、痛え、と財布だけは、しっかり握って、左右の頬をさんざん殴らせているような図と似ていてではないか。そうして、ひとりで、ぶつぶつ言いながら泣き寝入りだ。キリストだって、いざという時には、やったのだ。「われ地に平和を投ぜんために来れりきたと思うな、平和にあらず、反かえつて剣を投ぜん為に来れり。」とさえ言っているではないか。あるいは剣術の心得のあった人かも知れない。怒った時には、縄切なわきれを振りまわしてエルサレムの宮の商人たちを打ちようちやく擲したほどの人である。決して、色白の、やさ男ではない。やさ男どころか、

或る神学者の説に依ると、筋骨たくましく堂々たる偉丈夫だった
そうではないか。虫も殺さぬ大慈大悲のお釈迦しゃかさまだつて、その
お若い頃、耶輸陀羅姫やしゅだらという美しいお姫さまをお妃に迎えたいば
かりに、恋敵の五百人の若者たちと武技をきそい、誰も引く事の
出来ない剛弓で、七本の多羅樹と鉄の猪を射貫き、めでたく耶輸
陀羅姫をお妃にお迎えなさつたとかいう事も聞いている。七本の
多羅樹と鉄の猪を射透すとは、まことに驚くべきお力である。ま
ったく、それだからこそ、弟子たちも心服したのだ。腕力の強い
奴には、どこやら落ちつきがある。と黄村先生もおっしゃった。
その落ちつきが、世の人に思慕の心を起させるのだ。源氏が今で
も人気があるのは、源氏の人たちが武術に於いて、ずば抜けて強

かつたからである。頼光をはじめ、鎮西八郎、悪源太義平などの武勇に就いては知らぬ人も無いだろうが、あの、八幡太郎義家でも、その風流、人徳、兵法に於いて優れていたばかりでなく、やはり男一匹として腕に覚えがあつたから、弓馬の神としてあがめられているのである。弓は天才的であつたようだ。矢継^{やつぎ}早^{ばや}の名人で、機関銃のように数百本の矢をまたたく間にひゅうひゅうと敵陣に射込み、しかも百発百中、という講談のようになってしまふが、しかし源氏には、不思議なくらい弓馬の天才が続々とあらわれた事だけは本当である。血統というものは恐ろしいものである。酒飲みの子供は、たいてい酒飲みである。頼朝だって、ただ猜疑^{さいぎしん}心の強い、攻略一ぼうの人ではなかつた。平治の乱に破

れて一族と共に東国へ落ちる途中、当時十三歳の頼朝は馬上でうとうと居睡りをして、ひとり、はぐれた。平治物語に拠ると、

「十二月二十七日の夜更方の事なれば、暗さは暗し、先も見えねども、馬に任せて只一騎、心細く落ち給う。森山の宿に入り給えば、宿の者共云いけるは、『今夜馬の足音繁く聞ゆるは、落人げんなにあるらん、いざ留めん』とて、沙汰人数あまた多出でける中に、源内兵衛真弘いひようえさねひろと云う者、腹巻取つて打ち懸け、長刀持ちて走り

出でけるが、すけどの佐殿を見奉り、馬の口に取り付き、『落人をば留

め申せと、六波羅より仰せ下され給う』とて既に抱き下し奉らん

としければ、鬚切ひげきりの名刀を以て抜打にしとど打たれければ、真

弘が真向二つに打ち割られて、のけに倒れて死ににけり。続いて

出でける男は、『しれ者かな』とて馬の口に取り附く処を、同じ様に斬り給えば、籠手こての覆おおいより打ちて、打ち落されて退きにけり。その後、近附く者もなければ、云々。」とあつて、未だ十三歳いえずどと雖も、その手練の程は思いやられる。私が十三歳の時には、女中から怪談を聞かされて、二、三夜は、ひとりで便所へ行けなかつた。冗談ではない。実に、どうにも違い過ぎる。武人が武術に長じているのは自然の事でもあるが、しかし、文人だつて、鵠外などはやる時には大いにやった。「僕の震えているのが、わからんか。」などという妙な事を口走つてはいないのである。つかみ合つて庭へ落ちて、それから更に改めて攻勢に転じようとしたのである。漱石だつて銭湯で、無礼な職人をつかまえて、馬鹿野郎！

と呶鳴つて、その職人にあやませた事があるそうだ。なんでも、その職人が、うっかり水だか湯だかを漱石にひっつけたので、漱石は霹靂へきれきの如き一喝を浴びせたのだそうである。まっばだかで呶鳴つたのである。全裸で戦うのは、よほど腕力に自信のある人でなければ出来る芸当でない。漱石には、いささか武術の心得があつたのだと断しても、あながち輕忽けいこつの罪に当る事がないようににも思われる。漱石は、その己の錢湯の逸事を龍之介に語り、龍之介は、おそれおのこれいて之を世間に公表したようであるが、龍之介は漱石の晩年の弟子であるから、この錢湯の一件も、漱石がよっぽど、いいとしをしてからの逸事らしい。立派な口髭くちひげをはやしていたのだ。かの鷗外にしても立派な口髭をはやして軍医

総監という要職にありながら、やむにやまれず、不良の新聞記者と戦つて共に縁先から落ちたのだ。私などは未だ三十歳を少し越えたばかりの群小作家のひとりに過ぎない。自重もくそも、あるもんか。なぜ、やらないのだ。実は、からだが少し、などと病人づらをしようたつて駄目だ。むかしの武士は、血を吐きながらでも道場へかよつたものだ。宮本武蔵だつて、病身だつたのだ。自分の非力を補足するために、かの二刀流を案出したとかいう話さえ聞いている。武蔵の「独行道」を読んだか。剣の名人は、そのまま人生の達人だ。

一、世々の道に背くことなし。
そむ

二、万ずよろ依怙えこの心なし。

三、身に樂をたくまず。

四、一生の間欲心なし。

五、我事に於て後悔せず。

六、善惡につき他を妬ねたまず。

七、何の道にも別を悲まず。

八、自他ともに恨うらみかこつ心なし。

九、恋慕の思なし。

十、物事に数奇好みなし。

十一、居宅に望なし。

十二、身一つに美食を好まず。

十三、旧き道具を所持せず。

十四、我身にとり物を忌むことなし。

十五、兵具は格別、余の道具たしなまず。

十六、道にあたつて死を厭わず。

十七、老後財宝所領に心なし。

十八、神仏を尊み神仏を頼まず。

十九、心常に兵法の道を離れず。

男子の模範とはまさにかくの如き心境の人を言うのであろう。

それに較べて私はどうだろう。お話にも何もならぬ。われながら

呆^{あき}れて、再び日頃の汚濁の心境に落ち込まぬよう、自戒の嚴肅の

意図^{もつ}を以て左に私の十九箇条を列記しよう。愚者の懺悔^{ざんげ}だ。神も、

賢者も、おゆるし下さい。

一、世々の道は知らぬ。教えられても、へんにてれて、実行せぬ。

二、万ずに依怙の心あり。生意気な若い詩人たちを毛嫌いする事はなはだし。内気な、勉強家の二、三の学生に対してだけは、にこにこする。

三、身の安樂ばかりを考える。一家中に於いて、子供よりも早く寝て、そうして誰よりもおそく起きる事がある。女房が病氣をすると怒る。早くなおらないと承知しないぞ、と脅迫めいた事を口走る。女房に寝込まれると亭主の雑事が多くなる故なり。思索にふけると称して、毛布にくるまつて横たわり、いびきをかいている事あり。

四、慾の深き事、常軌じょうぎを逸したところあり。玩具屋おもちゃの前

に立ちて、あれもいや、これもいや、それでは何がいいのだと問われて、空のお月様を指差す子供と相通うところあり。大慾は無慾にさも似たり。

五、我、ことごとく後悔す。天魔に魅いられたる者の如し。きつと後悔すると知りながら、ふらりと踏込んで、さらに大いに後悔する。後悔の味も、やめられぬものと見えたり。

六、妬ねたむにはあらねど、いかなるわけか、成功者の悪口を言う傾向あり。

七、「サヨナラだけが人生だ」という先輩の詩句を口ずさみて
酔泣きせし事あり。

八、他をも恨めども、自らを恨むこと我より甚しきはあるまじ。起きてみつ寝てみつ胸中に恋慕の情絶える事無し。されども、すべて淡き空想に終るなり。およそ婦女子にもてざる事、わが右に出ずる者はあるまじ。顔面の大きすぎる故か。げせぬ事なり。やむなく我は堅^{かたじん}人を装わんとす。

十、数奇好み無からんと欲するも得ざるなり。美酒を好む。濁酒も辞せず。

十一、わが居宅は六畳、四畳半、三畳の三部屋なり。いま一部屋欲しと思わぬわけにもあらず。子供の騒ぎ廻る部屋にて仕事をするはいたく難儀にして、引越そうか、とふつと思う事あれども、わが前途の収入も心細ければ、また、無類の

おつくうがりの男なれば、すべて沙汰やみとなるなり。一部屋欲しと思う心はたしかにあり。居宅に望なき人の心境とはおのずから万里の距離あり。

十二、あながち美食を好むにはあらねど、きようのおかずは？

と一個の男子が、台所に向つて問を發せし事あるを告白す。下品の極なり。慚愧ざんきに堪えず。

十三、わが家に旧き道具の一つも無きは、われに売却の惡癖あるが故なり。藏書の売却の如きは最も頻ひんぱん繁なり。少しでも佳よき値に売りたいく、そのねばる事、われながら浅まし。物慾皆無にして、諸道具への愛着の念を断ち切り涼しく過し居れる人と、形はやや相似たれども、その心境の深淺の差

は、まさに千尋なり。

十四、わが身にとりて忌むもの多し。犬、蛇、毛虫、このごろのまた蠅はえのうるさき事よ。ほら吹き、最もきらい也。

十五、わが家に書画骨董こつとうの類の絶無なるは、主人の吝りんしよく 嗇さくの故なり。お皿一枚に五十円、百円、否、万金をさえ投ずる人の気持は、ついに主人の不可解とするところの如し、某日、この主人は一友を訪れたり。友は中庭の美事なる薔薇ばら数輪を手折りて、手土産に与えんとするを、この主人の固辞いわして曰く、野菜ならばもらつてもよい。以て全豹を推すべし。かの剣聖が武具の他の一切の道具をしりぞけし一すじの精進の心と似て非なること明白なり。なおまた、この

男には当分武具は禁物なり。氣違いに刃物の譬えたともあるなり。何をするかわかったものに非ず。弱き犬はよく人を噛むものなり。

十六、死は敢あえて厭うところのものに非ず。生き残つた妻子は、

ふびんなれども致し方なし。然れども今は、戦死の他の死はゆるされぬ。故に忼こらえて生きて居るなり。この命、今はなんとかしてお国の役に立ちたし。この一箇条、敢えて劍聖にゆずらじと思うものの、また考えてみると、死にたくない命をも捨てなければならぬところに尊さがあるので、なんでもかんでも死にたくて、うろうろ死場所を捜し廻っているのは自分勝手のわがままで、ああ、この一箇条もや

っぱり駄目なり。

十七、老後の財宝所領に心掛けるどころか、目前の日々の暮しに肝胆を砕いている有様で苦笑の他は無いが、けれども、老後あるいは私の死後、家族の困らぬ程度の財産は、あつたほうがよいとひそかに思っている。けれども、財産を遺すなどは私にとって奇蹟きせきに近い。財産は無くとも、仕事が残つておれば、なんとかなるんじゃないかしら、などと甘い、あどけない空想をしているんだからこれ之も落第。

十八、苦しい時の神だのみさ。もつとも一生くるしいかも知れないのだから、一生、神仏を忘れないとしても、それだつて神仏を頼むほうだ。剣聖の心境に背馳はいちすること千万なり。

十九、恥ずかしながらわが敵は、ちゆうぼう 廚 房 に在り。之をだまして、

怒らせず、以てわが働きの貧しさをごまかそうとするのが、私の兵法の全部である。之と争つて、時われに利あらず、旗を巻いて家を飛び出し、近くの井の頭公園の池畔をひとりしやうよう 逍 遥 している時の気持の暗さは類が無い。全世界の苦悩をひとりで背負っているみたいに深刻な顔をして歩いて、しきりに夫婦喧嘩の後始末に就いて工夫をこらしているのだから話にならない。よろず、ただ呆れたるより他のことは無しである。

劍聖の書遺した「独行道」と一条ずつ引較べて読んでみて下さい。不真面目な酔いどれ調にも似ているが、真理は、笑いながら

語つても真理だ。この愚者のいつわらざる告白も、賢明なる読者諸君に対して、いささかでも反省の資料になつてくれたら幸甚である。幼童のもて遊ぶ伊呂波歌留多にもあるならずや、ひ、人の振り見てわが振り直せ、と。

三

とにかく、私は、うんざりしたのだ。どうにも、これでは、駄目である。まるで、見込みが無いのである。男は、武術。之の修行を怠っている男は永遠に無価値である、と黄村先生に教^{さと}え諭され、心にしみるものがあり、二、三の文献を調べてみても、全く

そのとおり、黄村先生のお説の正しさが明白になって来るばかりであつたが、さて、ひるがえつてわが身の現状を見つめるならば、どうにも、あまりにひどい。一つとして手がかりの無い儼然^{げんぜん}たる絶壁に面して立つた気持で、私は、いたずらに溜息をもらすばかりであつた。私の家の近所に整骨院があつて、その主人は柔道五段か何かで、小さい道場も設備せられてある。夕方、職場から歸つた産業戦士たちが、その道場に立寄つて、どたんばたんと稽古をしている。私は散歩の途中、その道場の窓の下に立ちどまり、背伸びしてそつと道場の内部を覗^{のぞ}いてみる。実に壮烈なものである。私は、若い頑強の肉体を、生れてはじめて、胸の焼け焦げる程うらやましく思った。うなだれて、そのすぐ近くの禅林寺

に行つてみる。この寺の裏には、森鷗外の墓がある。どういふわけで、鷗外の墓が、こんな東京府下の三鷹町にあるのか、私にはわからない。けれども、ここの墓地は清潔で、鷗外の文章の片影がある。私の汚い骨も、こんな小綺麗な墓地の片隅に埋められたら、死後の救いがあるかも知れないと、ひそかに甘い空想をした日も無いではなかったが、今はもう、氣持が畏縮いしゆくしてしまつて、そんな空想など雲散霧消した。私には、そんな資格が無い。立派な口髭くちひげを生やしなから、酔漢を相手に敢然と格闘して縁先から墜落したほどの豪傑と、同じ墓地に眠る資格は私に無い。お前なんかは、墓地の扱えり好みなんて出来る身分ではないのだ。はつきりと、身の程を知らなければならぬ。私はその日、鷗外の端然た

る黒い墓碑をちらと横目で見ただけで、あわてて帰宅したのである。家へ帰ると、一通の手紙が私を待受けていた。黄村先生からのお便りである。ああ、ここに先駆者がいた。私たちの、光榮ある悲壮の先駆者がいたのだ。以下はそのお便りの全文である。

前略。その後は如何。いかが。老生ちかごろ白氏の所謂、いわゆる間事かんじを営み

自ら笑うの心境に有これありそうろう之候。先日おいでの折、男子の面目は

在武術と説き、しよけい諸卿の素直なる御賛同を得たるも、教訓する者

みずから率そつせん先して実行せざれば、あたらず卓説も瓦礫がれきに等しく意

味無きものと相成るべく、老生もとより愚昧ぐまいと雖も教いえどえて責を負

わざる無反省の教師にては無これなく之、昨夕、老骨奮起一番して弓の

道場を訪れ申候。悲しい哉、かな老いの筋骨亀縮して手足十分に伸び

申さず、わななきわななき引きしぼって放ちたる矢の的にはとど
かで、すぐ目前の砂利の上にはぱたりぱたりと落ちる淋しさ、お察
しくだされたく被下度候。南無八幡なむはちまん！と瞑目めいもくして深く念じて放ちたる弦
は、わが耳をびゅんと撃ちて、いやもう痛いなの、そこら中
を走り狂い叫きょうかん喚うめしたき程の劇痛げきつうに有之候えども、南無八幡
！とかすれたる声もて呻うめき念じ、辛じて堪え忍ぶ有様に御座候。
然れども、之を以て直ちに老生の武術に於ける才能の貧困うんおうを云々
するは早計にて、嘗かつて誰か、ただ一日の修行にて武術の蘊奥
を極め得たる。思う念力、岩をもとおすためしも有之、あたかも、
太原の一男子自ら顧るに庸且つ鄙たりと雖も、たゆまざる努力を
用いて必ずやこの老いの瘦腕に八郎にも劣らぬくろがねの筋をぶ

ち込んでお目に掛けんと固く決意仕り、ひとり首肯してその夜の
 稽古は打止めに致し、帰途は鳴瀬医院に立寄つて耳の診察を乞い、
 鼓膜こまくは別に何ともなっていないませんと診断を得てほつと致し、さ
 らに勇氣百倍、阿佐ヶ谷の省線踏切の傍なる屋台店にずいとはい
 り申候。酒不足の折柄、老生もこのごろは、この屋台店の生葡萄
 酒にて渴を医いす事に致し居候。四月なり。落花紛々の陽春なり。
 屋台の裏にも山桜の太木三本有之、微風吹き来る度毎に、おびた
 だしく花びらこぼれ飛び散り、落花ひんぷん繽紛として屋台の内部にま
 で吹き込み、意気さかんの弓術修行者は酔わじと欲するもかなわ
 ぬ風情、御賢察のほど願ねがいあげ上そうろう候。然るに、ここに突如として、
 いまわしき邪魔者の現れ申候。これ老生の近辺に住む老画伯にし

て、三十年続けて官展に油画を搬入し、三十年続けて落選し、しかもその官展に反旗をひるがえす程の意気もなく、きつきゆうじよ鞠躬如として審査の諸先生に松まつたけ蕈などを贈るとかの噂うわさも有之、その甲斐もなく三十年連続の落選という何の取りどころも無き奇態の人物に御座候えども、父祖伝来のかなりの財産を後生大事に守り居る様子にて、しかしながら人間の価値その財産に依つて決定せらるべきものならば老生は只今、割腹し果申すべし、杉田老画伯の如きは孫の数人もありながら赤き襟えりかざり飾など致して、へんに風態を若々しく装い、もつ以て老生を常日頃より牽制せんとする意図極めてあらわに見え申候。これまた笑止千万の事にて、美々しき服装、われに於いて何のうらやましき事も無之、全く黙殺し去らんと心

掛申候えども、この人物は身のたけ六尺、顔面は赤銅色に輝き腕の太さは松の大木の如く、近所の質屋の猛犬を蹴殺したとかの噂も仄聞^{そくぶん}致し居り、甚だ薄気味わるく御座候えば、老生はこの人物に対しては露骨に輕侮^{けいぶ}の色を示さず、常に技巧的な笑いを以て御挨拶申上げ居り候。しかるに今この怪人物、ぬつと屋台店に這^{はい}入り来り、やあ老人、やつてるな、と叫び候。かれ既に少しく酔っている様子に見え候えども、老人やつてるな、とはぶしつけな奴と内心ひそかに呆れ^{あき}申候。お手前だつて、やはり老人には候わずや。武士は相見互いという事あるを知らずや。心無き振舞いかな、と老生少しく苦々しく存じ居り候ところに、またもや、老人もこのごろは落ちましたな、こんな店でとぐろを巻いていると

は知らなかつた、と例の人を見くですが如き失敬の態度にて老生を嘲ちやうしやうかまつ笑仕り候。老生は蛇では御座らぬ。とぐろとは無礼千万なりと思えども、相手は身のたけ六尺、松の木の腕なれば、老生もじつと辛抱仕り候て、あいまいの笑いを口辺に浮べ、もつぱら敬遠の策を施し居り候。しかるに杉田老画伯は調子に乗り、一体この店には何があるのだ、生葡萄酒か、ふむ、ぶていさいなものを飲んでいやがる、おやじ、おれにもその生葡萄酒ちようものを一杯ついでもらいたい、ふむ、これが生葡萄酒か、ペッペ、腐つた酢すの如きものじゃないか、ごめんこうむる、あるじ勘定をたのむ、いくらだ、とわれを嘲ちやうろう弄せんとする意図あからさまなる言辞を吐き、帰りしなにふいと、老人、気をつけ給え、このごろ

不良の学生たちを大勢集めて気焰きえんを揚げ、先生とか何とか言われて恐悦がつているようだが、汝は隣組の注意人物になつてゐるのだぞ、老婆心ながら忠告致す、と口速に言いてすなわち之これが捨すて台詞りふとでも称すべきものならんか、屋台の暖簾のれんを排して外に出でんとするを、老生すかさず、待て！ と叫喚して押止め申候。われは隣組常会に於いて決議せられたる事項にそむきし事ただの一度も無之、月々に割り当てられたる債券は率先して購入仕り、また八幡宮に於ける毎月八日の武運長久の祈願には汝等と共に必ず参加申上候わずや、何を以てか我を注意人物となす、名誉毀損なり、そもそも老婆心の忠告とは古来、その心裡の卑猥ひわい陋ろう醜しゆうなる者の最後に試みる牽制の武器にして、かの宇治川先陣、佐々

木の囁きささやに徴してもその間の事情明々白々なり、いかにも汝は卑

怯未練の老婆なり、殊にもわが親愛なる学生諸君を不良とは何事、
義憤制すべからず、いまこそ決然立つべき時なり、たとい一日た
りとも我は既に武術の心得ある男子なり、呉下阿蒙ごかのあもうには非ざるな
り、撃つべし、かれいかに質屋の猛犬を蹴殺したる大剛と雖も、

南無八幡！ と念じて撃たば、まさに瓦鶏にも等しかるべし、や
れ！ と咄嗟とつさのうちに覚悟を極めき申候て、待て！ と叫喚に及び

たる次第に御座候。相手は、何かというげんの間抜けづらにて、
ちらと老生を見返り、ふんと笑つて屋台の外に出るその背後に浴
びせ更にまた一声、老婆待て！ と呼ばわり、老生も続いて屋台
の外に躍り出申候。屋台の外は、落花紛々。老生の初陣を慶祝す

るが如き風情に有之候。老生はただちに身仕度を開始せり。まず上顎の入歯をはずし、道路の片隅に安置せり。この身仕度は少しく苦笑の仕草に似たれども、老生の上顎は御承知の如く総入歯にて、之を作るに二箇月の時日と三百円の大金を掛申候ものに御座候えば、ただいま松の木の怪腕と格闘して破損などの憂目を見てはたまらぬという冷静の思慮を以てまず入歯をはずし路傍に安置仕り候ものにて、さて、目前の大剛を見上げ、汝はこのごろ生意気なり、隣組は仲良くすべきものなり、人のあらばかり捜して嘲笑せんとの心掛は下品尾籠びろうの極度なり、よしよし今宵は天に代りて汝を、などと申述べ候も、入歯をはずし申候ゆえ、発音いちじるしく明瞭を欠き、われながらいやになり、今は之まで、と腕を

伸ばして、老画伯の赤銅色に輝く左頬をパンパンパンと三つ殴りなぐ候えども、画伯はあつけにとられたる表情にて、口を少しくあけ、ぼんやりつつ立っているばかりに御座候。張合い無き事おびただしき果はたしあい合くだんに有之候。相手は無言なれば、老生も無言のままに引下り、件の入歯を路傍より拾い上げんとせしに、あわれ、天の悪いたずら戯わにや、いましめにや。落花間断なく乱れ散り、いつしか路傍に白雪の如く吹き溜り候て、老生の入歯をも被い隠したりと見え、いずこもただ白皚はくがいがい々の有様に候えば老生いささか狼狽仕り、たしかにここと思うあたりを手さぐりにて這うが如くに捜し廻り申候。なんですか、とわが呆ぼうぜん然たる敵手は、この時、夢より醒さめたる面持にて老生に問い、老生は這い廻りながら、いや、入歯

ですがね、たしかに、この辺に、などと呟いて、その気まりの悪さ。古今東西を通じて、かかるみじめなる経験に逢いし武芸者は、おそらくは一人もあるまじと思えば、なおのこと悲しくあいなりそう相成ろう候て、なにしろあれは三百円、などと低俗の老いの愚痴もついで、落花繽紛たる暗闇の底をひとり這い廻る光景に接しては、わが敵手もさすがに惻そくいん隠の心を起し給いし様子に御座候。老生と共に四つ這いになり、たしかに、この辺なのです、三百円とは、高いものです、などと言いつつ桜の花びらの吹溜りのここかしこに手をつっこみ、素直にお捜し下さる次第と相成申候。ありがとうございます、という老生の声は、獣の呻き声にも似て憂愁やるかた無く、あの入歯を失わば、われはまた二箇月間、歯医

者に通い、その間、一物も噛む事かなわず、わずかにお粥かゆをすす
つて生きのび、またわが面貌も齒の無き時はいたく面變りてさら
に二十年も老け込み、笑顔の醜怪なる事無類なり、ああ、明日よ
りの我が人生は地獄の如し、と泣くにも泣けぬせつない氣持にな
り申候いき。杉田老画伯は心利きたる人なれば、やがて屋台店よ
り一本の小さき筭ほうきを借り来り、尚も間斷なく散り乱れ積る花びら
を、この辺ですか、この辺ですか、と言いつつさっさと左右に
掃きわけ、突如、あ！ ありましたあ！ と歡喜の声を上げ申候。
たつたいま己の頬をパンパンパンと三つも殴った男の入齒が見つ
かったとて、邪念無くしんから喜んで下さる老画伯の心意氣の程
が、老生には何にもまして嬉うれしく有難く、入齒なんかどうでもい

いというような氣持にさえ相成り、然れども入歯もまた見つかつてゐる筈は無之、老生は二重にも三重にも嬉しく、杉田老画伯よりその入歯を受取り直ちに口中に含み申候いしが、入歯には桜の花びらおびただしく附着致し居る様子にて、噛みしめると幽かに渋い味が感ぜられ申候。杉田さん、どうか老生を殴つて下さい、と笑いながら頬を差出申候ところ、老画伯もさるもの、よし来たといい掌に唾つばきして、ぐわんと老生の左の頬を撃ちのめし、意氣揚々と引上げ行き申候。もう少し加減してくれるかと思ひのほか、かの松の木の怪腕の力の限りを發揮して殴りつけたものの如く、老生の両眼より小さき星あまた飛散致し、一時、失神の思いに御座候。かれもまた、なかなかの馬鹿者に候。以上は、わが武勇伝

のあらましの御報に御座候えども、今日つらつら考えるに、武術は同胞に対して実行すべきものに非ず、きゆうせん弓きゆう 箭せんは遠く海のあな
たに飛ばざるべからず、老生も更に心魂を練り直し、隣人を憎ま
ず、さげすまず、白氏の所謂、残燈滅して又明らかの希望を以て
武術のみょうけつ妙訣みょうけつを感得仕るよう不断精進の所存に御座候えば、卿け
等いらわかき後輩も、老生のこのたびの浅慮の覆ふく轍てつをいささか後輪
の戒となし給い、いよいよ身心の練磨に努めて決して負け給うな。
祈念。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年1月31日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：夏海

2000年11月17日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花吹雪

太宰治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>